

前号作品短評A 〈小野澤〉

●クリスマス形見のような『クオレ』繰る

新野祐子

(原題「More」心)の意) 児童文学書。デアミーチス作。一八八六年発表。邦訳題名「愛の学校」。エ
ンリコ少年の学校や家庭での日常生活を通して人間愛、祖国愛の美しさをうたいあげた(以上、精選版『日
本国語大辞典』)。この作品から何を読み取つたらよいのか、は人によるかもしれない。善意、勇気、労働
などの尊さだろうか。繰る、はページを繰る。だれの形見か。前三句からはお父さんだろう。作品中でも、
お父さん、お母さんの存在は大きい。形見のような、に微妙なものがある。父の形見の、としたときとど
う違うだろう。カタカナの「クオレ」はクリスマスと同質な舞台になっている。

二句、五句、六句目で中村哲氏に触れ、横たう水路(六句目)も、そう読むことができる。

あの世より雪降らぬ里憂うかな

憂うのはお父さんだろう。里は、故里でもある。今冬は雪が少なかったようだ。

●ひそやかにトトロの帽子と名づけたる大きい二本の木がなくなりぬ

布宮慈子

これもまた在所の歌。といつてもものびやかでふつくらとした語り口には、少し弾んだ調子がある。トト
ロの帽子があり、大きなでなく、大きい、なくなりぬ、といったところがそう読ませるようだ。

帽子に限らず、トトロにはベビーグッズが多い(トトロの帽子手編みもウェブ検索では候補語になつて
いた)。この歌では大きい二本の木、また、木は檜葉だったらか、その木、牡丹(落葉小低木)、松の木、

松、松の木、大木の松、とこの一連では身近な木が多く詠われた。人(ヤマさん)との関わりも牡丹の記
憶とともにある、羽州街道を見続けてきたはず、という大木(松)の記憶もある。その木を記憶すること
でもある。

大木は羽州街道を見続けてきたはず松の記憶は永遠

雪少な雪少なとてたまに降る雪はうつくしすべてを覆ふ

記憶が覆うものもすべてなのだとおもう。

●校庭の古りし囲いの山茶花は取り払われて高さ堀立つ

市川茂子

学校、とくに身近な小中学校となると、何か囲いがあるだろう。市中であつてはそれがコンクリという
こともある。全体でなくとも、生垣となつていたところがあつたかもしれない。それが、この歌では山茶
花で、もう長い経過がある。取り払われたことで、改めて気付く。こういうことはある。近所の小中学校
では、フェンスのところもあり、そのフェンスも高さがある。校庭の出入りも管理されていて、昔とは違つ
ている。いろいろあつて、今がある。ひとつの経過感だが、直接に云つてはいないが、さびしいものだ。

東京の桜開花の標本木老木ながら境内にあり

寺社の境内はだいたいのところ開放されている。桜開花は東京が割合早く、その標本木もしられている
が、老木ながら、というところに作者の注目がある。古りし、と同じように、経過感が作者にはあるよう
だ。境内は一種の公共空間。ひとつの共感がある。

前号作品短評B 〈慈子〉

●モミジにも種類はあれどことごとく言葉によりて秋化粧まで

小野澤繁雄

モミジについて調べてみると次のような解説があった。「一般にカエデと呼ばれている樹木は、カエデ科カエデ属の、主として北半球の温帯に分布している150種を総称したものです。特に、東アジアを中心に日本に約20種、中国に約30種が分布し、北アメリカ、ヨーロッパにまで広がっています。(中略) 園芸品種が多く、特にイロハモミジ(イロハカエデともいう。Acer palmatum)や、ハウチワカエデ(Acer japonicum)など、日本産の種に属する品種が200〜400品種といわれています。園芸の世界では、切れ込みが深く数が多いものをモミジ、浅く少ないものをカエデと呼んでいます」「みんなの園芸」NHK出版)。じつに多くの種類があり、秋の代名詞のようなモミジ。そのいずれにも名前が付き分類されている様子を驚きをもって眺めているようだ。

みちのはば隔ててここにすれ違うかすかながらに少女はうたう

散歩の途中だろうか。すれ違うまで少女が歌っている声は聞こえなかった。歩いて近づいていくと「かすかながらに」歌っていることに気がつく。一瞬の出来事が一首となった。何かいいことに出合ったような、ふわりとした感覚が残る。

●とりたてて不具合なけれど買ひ換へる年末商戦の「パソコン一式」

河村郁子

「新しいパソコン」と題する一連。パソコンとはたいへん便利なものだが、絶えずアップデートやら何やら、買って終わりというわけにはいかない。しかし、作者には常に新しいものに挑戦する気持ちがある。それは素晴らしいことだ。

ディスプレイ一行のみのワープロに漢字の変換初めてなせり

タイプライターからワープロへ、そしてパソコンへと、世の中の文章作成技術は大きく変わってきた。とりわけパソコンは一台で何でもできるものとして、今や手放せないものとなっている。ワープロへの最初の入力「時」を切り取った一首である。ごく初期のワープロを経験した者にとって、この歌はたいそう感慨深いものであるはずだ。

●よき香放つ枯葉の山に潜る子等

谷垣満壽子

秋の晴れた日、近所の子どもたちが枯葉の山につきつぎと飛び込む。その様子が見えるようである。あとで焼き芋をすれば完璧だ。最近、こういった子どもはあまり見かけない。だから一層惹かれるのかもしれない。

積雪は如何ばかりかと雪女郎

物語性の強い句である。いよいよ寒くなる冬の入り口に、ことしの雪はどんな具合かと思う。そこに雪女郎を立たせる不気味さ。しかし結果は、雪国といわれる地方でさえほとんど雪のない冬であった。雪女郎はどんな思いでいたことであろう。